

## 教養とは何か

—J.S. ミルと K.E. ボールディングから学ぶ—

阿部秀二郎

はじめに

2013年、2014年は、日本の経済学者にとって経済学という学問について、日頃よりも深く考える2年であったと言えよう。

2007年に招集された中央教育審議会の答申に基づき、日本学術会議で「分野別質保証の在り方」が議論されることになった。その後分野別に参照基準検討委員会が設置され、そこで「教育課程編成上の参照基準」（以下「参照基準」）が策定されることになった。<sup>1</sup>

経済学分野における参照基準案が、日本学術会議の経済学分科会で議論されたわけだが、その案を巡り様々な学会からの意見書が提出された。これはこの参照基準案を通して日本の経済学者が、今一度経済学について思考する機会になったことを意味する。<sup>2</sup>

この議論は、次の大きな二つの考え方の間でのものとまとめることができよう。一方は次である。ミクロマクロ経済学と統計学とを基礎とした標準化が国際的に存在し、日本もその標準を利用するべきであるという考え方である。他方は次である。ミクロマクロ経済学と統計学以外にも、それらとは共約できないアプローチが経済学には存在し、前者を一つの標準としてまとめようとする、それが「*de facto standard*」として確立した場合、経済学の発展に好ましくない影響を与える可能性があるという考え方である。

筆者がこの議論に興味を持った理由は二つある。一つは筆者の専門が経済学の歴史であること、もう一つは、議論で二つのアプローチがそれぞれ対立して、互いを排除しているのはなぜか、一方が標準とし他方を標準外とした場合、標準外は無意味なものとして消失することはあり得るのかを疑問に思ったからである。そして後者の疑問は筆者の中に蓄積されていた、19世紀イギリスの教養教育に関する論争に対するJ.S. ミルの考え方<sup>3</sup>と、20世紀アメリカにおいて正統派経済学に批判的な論を展開したボールディングの考え方についての意識に訴えかけるものが存在した。

本論文では、この点と関連させながら、経済学史を専門とする筆者の考え方を提示していきたい。

### I. ミルの『大学教育について』

19世紀イギリスの教養教育論争はSanderson (1975) の第3章でも詳しいが、

ここでは、先行研究を踏まえた中村（2011）を利用して説明する。<sup>4</sup>

中村（2011）によれば、オックスブリッジでの教育が職業と関連しない古典教育に特化しているものとする批判が19世紀初頭にS. スミスによってなされたのに端を発し、1860年代、70年代に自然科学、社会科学などに基盤を据えた産業や職業が勃興する中で、19世紀末以降論争が展開された。

論争に対するミルの回答は次である。

「大学は職業教育の場ではありません。大学は、生計を得るためのある特定の手段に人々を適応させるのに必要な知識を教えることを目的とはしていません。大学の目的は・・・有能で教養ある人間を育成することにあります。」（Mill, J.S. (1867) 218、訳12）

しかしS. スミスに対抗し伝統的なオックスブリッジの教育を保守することをミルが肯定しているわけではない。スコットランドのセント・アンドルーズ大学での名誉学長就任時の講演であるという事実を斟酌したとしても、ミルは当時のオックスブリッジと比較してスコットランドの大学の教育過程が秀でていることを指摘する。<sup>5</sup>

「青年たちはほとんど何も知らないでスコットランドの各大学に入学し、ここで初めて教えられます。イングランドの各大学に入学する学生の大部分も彼ら以上に無知の状態に入学し、そして無知のまま大学を出て行くのです。・・・イングランドの大学は、長い教育の重要性と実際の努力目標を古典語と数学の二科目に限定してきましたが、諸君の大学はそのようなことはしてきませんでした。・・・スコットランドの大学の教育課程について語ることは、一般的な教養<sup>6</sup>を構成している重要な各部門について概説することに他なりません。」（Mill, J.S. (1867) 220、訳18－9）

スコットランドの大学の教育課程が秀でている理由は、「教養を構成している重要な各部門」を教えているからであるとミルは論じている。その後の講演はこの各部門（文学、自然科学、道徳科学、道徳と宗教、美学・芸術）が、学生個人にとっても、また人間性の強化を通じて人類全体にとっても重要なものであるか、そしてどのように各部分が協力し合うのかを説明する構成となっている。

この講演を読むと、専門教育と教養教育とが分化されている現代的な識別が理解できなくなる。つまりミルはその内容やレベルにおいて、「専門教育」と「教養教育」との区別をしているのではなく、「専門教育」は「個別教育」であり、「教養教育」とは個別教育から構成されるものと理解される。

「一般教養教育とは、学生がすでに個別に学んできたことを包括的に見る見方と関係づける仕方を教えるとされていますが、その最終段階においては、諸科学の「体系化」、すなわち、人間の知性が既知のものから未知のものへと

進むその進み方についての哲学的研究が含まれています。」(Mill,J.S. (1867) 219、訳 16)

ミルの大学教育論の背景には、当時のイギリスの経済状況が存在することは明確である。ミルはスミス以来そしてリカードウの議論も踏まえ、イギリス経済は利潤率が低下していき、「定常状態 (stationary state)」になると考える。

経済成長が停止する状態は、多くの経済学者にとっては好ましいとはいえず、その状態を打ち破るべき成長理論を掲げようとする。そして実際にミル以降に登場するシュンペーターのイノベーション論は経済成長と結びつくという解釈も残す理論であるから、現在もイノベーションを社会に起こそうとする考え方が蔓延していると思われる。

一方でミルは、イノベーションの存在を認識していないばかりか、定常状態を肯定的に受け入れる。その理由は、定常状態は経済成長状態ではなくとも、人間として成長する条件の整った好ましい社会状態になっていると予想するからである。

「・・・人生の美点美質 (graces of life) を自由に探求し、またより不利な事情のもとにある諸階級に対し、その成長のために、その美点美質の手本を見せることができるような人びとの群れが、現在よりもはるかに大きくなっている・・・。このような、今日の社会状態よりもはるかにすぐれた社会状態は、ただ停止状態と完全に両立するというばかりでなく、また他のいかなる状態とよりも、まさにこの停止状態ともっとも自然的に相伴うのである。」(Mill,J.S.(1848)755、訳 107—08)

この「美点美質」を獲得するために必要なものとしてミルは「孤独」を挙げる。孤独は他人からの介入を回避することで、自由に自らの思索を深めることができる状態である。そしてその孤独を実現できる条件としてミルは物理的な自然状態を提示する。この考え方は人間の成長におけるアダム・スミスの空間理論と類似している。スミスも人間がバランスよく成長する上で都市空間での競争と農村空間での黙考との両方が必要であるという論を展開した。ミルが市場経済の競争の利益とともに求めたのは、外的な圧力から距離を置いた自立的でバランスのとれた主体を生み出す環境であった。

この外的状況が大学教育でも求められる。必然、ミルが求める人間の成長を支える教育は専門的に特化したものよりも全体的にバランスの良くとれたものになる。

「知識の各分野は今や詳細な事実が詰め込まれ、その結果、一つの分野を詳しくかつ正確に知ろうと思う人は、その分野全体のより小さな部分に限定せざるをえなくなるでしょう。・・・もしそのような些細な部分を完全に知るために、人はそれ以外のすべてのことについてまったく無知でなければ

ならないとするならば、間もなく人はごく些細な人間的欲望や欲求を満たすことはできるとしても、その他の人間的目的にとってはまったく無意味な存在になってしまわないでしょうか。・・・人間性というものは、小さなことに熟達すればするほどますます矮小化し、重要なことに対して不適合になっていくであろうと予測せざるをえません。」(Mill,J.S. (1867) 223、訳 27)

## II. ボールディングの「宗教から見た経済学」

I. で分析したミルの時代は19世紀であり、階級の存在、産業構造や技術レベル、教育学の展開など様々な点で相違が存在する。さらに指摘したように、ミルの教育論は人間本性に対するミルの考え方、その背後に存在する功利主義思想に影響を受けているし、ミル自身の精神の危機を通じた経験に基づく考え方であることを否定はできない。この点で特定の時代と空間などの条件や前提に基づく、ミルの主観性を排除できていないという問題は存在する。

しかしそれらの条件や前提を考慮すること、それらを考慮するかしないかに関わらずミルの人間の成長に関する考え方と、その成長を支える教育施設としての大学教育の認識とが反証されたかという問題とは別であろう。少なくともこれから見ていく1970年代においてもこのミルの考え方は否定されてはいないと考えられる根拠を、もう一人の経済学者であるボールディングの考え方を見ていくことで、提示してみよう。<sup>8</sup>

ボールディングの特定の時代や空間などの条件や前提については、池上(1993)、都留(2005)において紹介されている。

ボールディングが経済学と宗教とを論じる背景には、彼自身がメソディストであるということ、彼の出身がリバプールで、イギリスにありながら他民族を有するアメリカ的な地域であったこと、オックスフォードでの数学専攻、彼が生きた時代が戦前・戦中・戦後の激動の時代であることなどを押さえる必要があるだろう。

ボールディングの貢献の中に「一般システム論」が存在している。この「一般システム論」を主張したのは、生物学者のベルタランフィであるとされる。<sup>9</sup>彼は当時生物学の研究でも力を有した機械論的接近法に限界を感じ、その接近法の限界は社会現象までも至るという認識を有していた。そこで彼は全体要素を個別に分解するのではなく、全体のシステムそのものを対象とする学問を展開しようとしたのである。そして同様の問題関心を共有した一人にボールディングという経済学者が存在したのである。

「宗教から見た経済学」の概要は次である。

宗教は経済学に、経済学は宗教に影響を与え、かつ影響を与えられている。宗

教は人々の消費行動に影響を与える。他方で経済学が宗教に影響を与える論理は次である。宗教が社会に発生するのは生物学における「突然変異」と同様のものであり説明ができない。しかし一度成立した宗教がその後人々に受け入れられる可能性は、宗教の教えがその当時の経済状況、人間の欲望や実現手段を適切に把握し伝播される要素を含んでいるかどうかによって依存するし、社会が停滞的状況における宗教は来世に可能性を求める方向へ、逆に進歩的状況における宗教は現世的な指向を持つ。このような分析を行うボールドィングにとって、歴史的な経済分析における宗教の理解は必要なものであった。

「それゆえわれわれは、宗教がそのきわめて重大で意義深い一部である社会的な諸現象の全宇宙に言及することなしに、時の流れのなかで生ずる経済的な過程を理解することはできないのである。」(Boulding(1950)186、訳 289)

ボールドィングは経済現象と宗教との関係について認識していた稀有な経済学者として、アダム・スミスを挙げる。スミスは市場原理が宗教活動にも影響を与えることを認識しており、独占的な国教会に対して新興的な宗教（メソジスト派も含む）が競争相手として存在する利益を主張する。<sup>10</sup>

しかし同時に、ボールドィングはスミスを評価しつつも、宗教が与える影響についてスミスは部分的にしき理解できていないとする。新興的な宗教の持つ本質的な利益は、社会的に変革をもたらすことなのだが、スミスは市場経済の論理を宗教に適用することしか考えていない。

「宗教の内容についてのいかなる深い理解をも、見出すことができない。」(Boulding(1950)189、訳 294)

このようにボールドィングがスミスを挙げる理由は、経済学という学問の有益性と危険性がスミスから生じたことと認識しているように思える。有益性とは科学性である。経済学者または経済学を教える者が宗教者のように情熱や感情によって経済社会現象を説明しようとするれば、「専門的な学問分野の科学的な統合性を掘り崩す」可能性がある。危険性とは目的が社会経済問題に向かわなくなってしまうことにある。

「科学的な抽象の洗練にあまりに夢中になりすぎて、社会の病気のことを忘れてしまい、腹を空かした人々の叫び声が聞こえず虐げられた者の困窮が見えなくなってしまう。」(Boulding(1950)191、訳 297)

経済学の科学性によって見える部分として、ボールドィングは「労働の商品」を指摘する。人間が提供する労働を商品と見なすことで、商品の供給と商品の需要によって価格が決定するという需要供給法則の適用が可能になる。一方経済学の科学性が見えなくするものとして、商品である労働を提供する人間性をボールドィングは指摘する。つまり労働の供給者の事情には人間としての性質（心理

学的、社会学的、神学的)が前提として存在していることに目をつむれば、潤滑な労使関係は成立しなくなってしまう。<sup>11</sup>

### Ⅲ. ミルとボールディング

ミルとボールディングとは、次の点で異なっている。ミルは1800年代、ボールディングは1900年代とほぼ1世紀の差がある。ミルはイギリス、ボールディングはアメリカで活躍していたという空間的差が存在する。ミルは幼年時代を恵まれた知的環境で過ごしたのに対して、ボールディングは恵まれているとは言えない状況で過ごした。

次に共通点を挙げる。ミルとボールディングは共に反国教会であった(ミルは無宗教<sup>12</sup>、ボールディングはメソヂスト)。ミルとボールディングの知的興味は経済学に限定されるものではなく、多方面に渡った。そしてその興味から引き出された考え方は経済学の考え方に影響を与えた(ミルの場合には定常状態における人間社会の成長の可能性、ボールディングの場合にはシステム論を前提とした応用経済学のあり方に示唆を提供した<sup>13</sup>)。最後に限定された知識、専門化した知識が有する弊害を共有していた。

この最後の部分を再度振り返る。ミルの場合には(経済学には限定されないが)技術や知識が細分化されるほど、その細分化した部分の完全性を求めることで、他の事に無知であるならば、それは「人間の精神を偏狭にし、誤らせる」と考えられている。ボールディングの場合には専門化した経済学は全要素的な人間を置き去りにし、商品や社会といった抽象的概念に固執し、その概念から人間性を逆に仮定すると考えられている<sup>14</sup>。

教育面での二人の対策は次になる。ミルの場合には他領域における知識を「深く」学ぶ機会を教育機関が提供すること、ボールディングの場合には研究者そして教師自身が全人的な人間として存在することで、全要素的な人間を経済学に据えること、そしてそれを教育することである。

ミルとボールディングを例として挙げたが、ミルが講演した大学の存在したスコットランドが輩出したアダム・スミスに対して、両者ともに高い評価を与えている。それはスミスが市場経済を発見したからではなく、経済学を含む道徳哲学の教育者だからである。<sup>15</sup>

ミルの時代からほぼ1世紀後のボールディングが住む世界において、ボールディングは経済学者に道徳哲学者たれと述べる。科学的専門性の強化が進む中で社会的人間として存在する必要性を認識しているからである。ボールディングの時代からさらに半世紀を迎えようとしており、大震災も経験した現代社会において、ミルの考え方、ボールディングの考え方はさらに重要になっていると思われる。

おわりに

「はじめに」に記した、経済学の参照基準に戻ることにする。ミルやボールディングの考え方から学ぶことができることは何か。ミルがセント・アンドルーズ大学で列挙した教養科目（経済学も含む）は大学教育の「基準」と呼んでもよいと思われる。もちろん時代的・地理的な制約は存在するであろうが、ミルの時代においても全く何を学んでよいかわからないという状況は想定されてはいない。ボールディングの場合には、当時のアメリカの経済学が「基準」的なものとして想定されている。

しかしミルやボールディングが、何が「基準」たるべきと考えていたかについては、残念ながら筆者の勉強を超えておりここでは提示できない。より重要と思われるのは、何らかの「基準」が存在したとしても、それが狭い専門的なものに特化して教育されることの弊害を読み取ることである。ミルの場合にはオックスブリッジの古典的教育もしくは数学教育に特化した限定的教育への批判が見られるし、ボールディングの場合にも数学的研究が過度になることで経済学を学ぶものの社会問題と向き合う姿勢が弱化する事への批判が見られる。

経済学の「参照基準」の議論において、多様な意見が提出されたことは紹介したが、その意味は経済学の中にも多数の視点が包含され、それぞれが経済学を学ぶ者にとっての教養としての意味を持つものであると考えることができるかもしれない。これを良い機会と捉え、すべての経済学者及び経済学を学ぶ学生がそれらの意見に耳を傾け、自らが研究している学問の位置づけについて学ぶことが重要であろう。奇しくもボールディングは次のような主張を行っていることに耳を傾けることが重要であろう。

「経済学者は、自分自身の精神的および知的な健康のためにも、予言者的な憤慨を示す人びとからの挑戦に直面してみなければなるまい。他方では予言者もまた、彼の予言者的な政策のことばに移すときが来たら、喜んでそれを知的分析という厳密な習練(ディシプリン)にゆだねる覚悟をもっていなくてはならないのである。」(Boulding(1950)197、訳 305)

最後に「教養とは何か」について、筆者は明確に回答を与えてはいないし、これからも筆者の言葉で紡ぐのは難しい。その点で本論文は完成していない。また本論文では二人の経済学者を利用して考察したが、他の経済学者または経済学と格闘している人間の言説は網羅できていない。その点にも問題がある。

現代の段階では「教養」を論理的に定義づけるのではなく、感覚的な定義になってしまう。一つ言えることがあるとすれば、ミルが指摘するように、多様な知的世界と遭遇しておけば、年齢とともにさまざまな欲が消失する場合でも、「多種多様な興味を感じるようになる」(Mill(1867)257、訳 134)と予想できそうである。

## 注

- <sup>1</sup> 日本学術会議の「委員会一覧」というウェブページを参照
- <sup>2</sup> 経済学分野の参照基準検討委員会委員長の要請に基づき寄せられた意見を表明した学協会は19であった。日本学術会議の「〔経済学分野の教育課程編成上の参照基準（分科会原案・第二次修正）〕に対する諸学会の意見・要望のまとめ」を参照。日本学術会議の「大学教育の分野別質保証委員会」というウェブページを見ていくと、「経済学」分野の審議の困難さを見ることができる。
- <sup>3</sup> 阿部（2013）を参照
- <sup>4</sup> フランスにおける教養教育論争は上垣（2012）で部分的に指摘されている。なお経済学との関連で興味深いのは、この論文でクールノーがフランス語教育に貢献したとされている指摘である。（67）
- <sup>5</sup> ミルの大学批判は2段階的である。当時のそれなりに人気のあった地質学教授のアダム・シジウィックが語る大学教育の考え方が皮相的であり思考的ではないこと、シジウィックがケンブリッジ大学を卒業しその教授のポストに就任していること、である。「セジウィック論」という論文は、シジウィックへの大学教育に関するもの以上の批判点も内包している。
- <sup>6</sup> 翻訳では「文化一般」とある。筆者は原語の「general culture」を「一般的な教養」と訳した。
- <sup>7</sup> 阿部（2003）を参照
- <sup>8</sup> 教育に関して見解を表明する経済学者は多く存在する。しかし経済学者は経済成長の手段として人間の成長、そして教育を把握することが多い。代表的な例がアダム・スミスである。スミスは『国富論』において、将来の財政支出を削減する目的での国民教育の可能性を展開している。またスミスは職業教育への投資が将来のサービスの付加価値を生み出すという考え方を展開しており、この考え方が1950年代以降のアメリカでミンサー、シュルツ、ベッカーらの人的資本論へと継承された。
- <sup>9</sup> ベルタランフィは、サイバネティクスや情報理論やゲーム理論分野の展開に貢献した。（山川（1971））
- <sup>10</sup> D. ヒュームは新興的な宗教が過度になった場合の拠り所として、スミスとは異なり国教会に期待するとしており、スミスとの間の対比的関係が指摘されている。（Boulding(1950)189、訳293）
- <sup>11</sup> Boulding(1950)194、訳301。このボールディングの認識と関連して、キリスト者賀川豊彦に対して下す労働経済学者としての隅谷の評価は再考すべき点があるように思われる。（阿部（2014）も参照）
- <sup>12</sup> Mill(1873)44、訳46
- <sup>13</sup> 本論文ではこの部分の説明が不足している。今後の課題としたい。本論文で利用したボールディングの論文の論点を端的にまとめると次に様になる。現象を要素に還元でき機械的に説明できる経済学の部分があることをボールディングは否定しない。純粋理論や経済制度の大部分はそれに該当する。しかし経済史、及び経済政策の領域では全要素的な人間と向き合う必要があるという点から人間が生存する社会システムを抜きには考察できないということになる。
- <sup>14</sup> 現在のマイクロ経済学はゲーム理論、実験経済学、行動経済学などの分析において、ボールディングが提言した方向に向かっていくと指摘することもできるかもしれない。
- <sup>15</sup> ミルについては『大学教育について』で確認できる。ボールディングはBoulding(1948)12、訳19を参照。

## 参考文献

- 阿部秀二郎 「チューネンとスミスにおける空間」『空間の社会経済学』（日本経済評論社、2003年、47 - 72）
- 「『豊饒な大学教育』への示唆」、『書評誌 リトルネロ』（第27号 岡田真理子編、2013年3月31日、1 - 2）
- 「賀川豊彦の経済思想」『経済理論』（和歌山大学経済学会、2014年、1 - 17）



- Boulding, K.E. Is Economics Necessary? in *Beyond Economics: Essays on Society, Religion, and Ethics*, University of Michigan Press, [1948]1968, 公文俊平訳『経済学を超えて』(学習研究社、1985年)
- Religious Perspectives in Economics in *Beyond Economics: Essays on Society, Religion, and Ethics*, University of Michigan Press, [1950]1968, 公文俊平訳『経済学を超えて』(学習研究社、1985年)
- 池上 淳 「K.E. ボールディングの生涯と業績」『経済論叢刊 調査と研究』(4、京都大学経済学会、1993年、47 - 63)
- Mill, J.S. Professor Sedgwick's Discours in *Collected Works of John Stuart Mill. Vol. X*. Toronto: University of Toronto Press, [1833]1984, 31-74. 竹内一誠、永山了平訳「セジウィック論」、杉原四郎・山下重一編『J.S. ミル初期著作集』第3巻、御茶の水書房、1980年、40 - 109
- *Principles of Political Economy Part II* in *Collected Works of John Stuart Mill, Vol. III*, Toronto: University Press, [1848]1984, 末永茂喜訳『経済学原理 四』、岩波文庫、1961年
- *Autobiography* in *Collected Works of John Stuart Mill, Vol. I*, Toronto: University Press: 1-290, 1873, 朱牟田夏雄訳『自伝』、岩波文庫、1988年
- *Inaugural Address Delivered to the University of St. Andrews*. In *Collected Works of John Stuart Mill, Vol. XXI*. Toronto: University of Toronto Press, [1867] 1984, 215 - 257, 竹内一誠訳、『大学教育について』、岩波文庫、2011年
- 中村 勝美 「イングランドの学士課程教育と教養教育理念 --19世紀大学改革を中心として」『西九州大学子ども学部紀要』(第2号、西九州大学子ども学部、2011年、27 - 36)
- Sanderson, M. *The Universities in the nineteenth century*, London: Routledge and Kegan Paul, 1975 安原義人訳『イギリスの大学改革』(玉川大学出版部、2003年)
- 都留 重人 「特別寄稿 学際人: ケネス・E・ボールディング」『学際』(14、構造計画研究所、2005年、55 - 61)
- 上垣 豊 「古典人文学による知的訓練: 19世紀フランスにおける教養論争の一側面」『龍谷紀要』(第33巻第2号、龍谷大学龍谷紀要編集会、2012年、59 - 74頁)
- 山川 偉也 「ルードヴィッヒ・フォン・ベルタランフィの一般システム論」『桃山学院大学人文科学研究』(7(1/2)、桃山学院大学、1971年、19 - 60)

#### 参照ウェブページ

日本学術会議: 「委員会一覧」

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/index.html#kadai>: アクセス 2015年1月29日

日本学術会議: 「『経済学分野の教育課程編成上の参照基準 (分科会原案・第二次修正)』に対する諸学会の意見・要望のまとめ」

[http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/bunya/keizai/pdf/shiryousanshoukijun\\_221102.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/bunya/keizai/pdf/shiryousanshoukijun_221102.pdf): アクセス 2015年1月29日

日本学術会議: 「大学教育の分野別質保証委員会」

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html>: アクセス日 2015年1月29日